

何が彼女を殺したか (十二卷)

新 興 映 畫

脚色並監督者 鈴木重吉
撮影者 三木茂
主演者 高津慶子
紹介 第四百十四號

この映画の一部が久米正雄の戯曲「三浦製絲工場主」からもつて來られた、さういふことは大して問題にはならない。何ぞなら、さういふことを問題にするのは、結局、久米正雄の過去の業績にケチをつけるものであり、又、鈴木重吉の新しい功績を低く見るものであるから。これは「何が彼女を殺したか」の續篇として、徹頭徹尾、鈴木重吉の名の許に、正しい評價がなされなければならぬものである。さて、資本主義社會は絶えず矛盾をつくり出す。いろいろな社會機構は、さうした矛盾によつて蔽はれてゐる。カラクリがある。缺陷が潜んでゐる。「何が彼女を殺したか」の五週間の續映は、中村すみ子といふ不幸な「少女」の行くさう、物質的、齒馬團・市議・養老院・天主院、どこへ行つても彼女の生活を壓迫した結果である。平明にして、而も底から湧きあがつて來る、かうした社會的缺陷への反逆精神の描寫に、大衆の強い共鳴と支持を得ることが出來たからである。そして今、再び「何が彼女を殺したか」に於て、放火罪に問はれ、八年の刑期を了へて出獄した不幸な「女」中村すみ子の行くさう、そこに立ちはだかつてゐる種々な社會的缺陷を、作者はわれわれの前に暴露する。(一) 冤囚保護事業、(二) 名譽職の收賄事件、(三) 私娼窟のカラクリ、(四) 労働争議の動機、(五) 大體以上四つの方面が暴露されてゐるのだ。

保護事業には相應しい。刑務所の冷たい扉を通るさうして「光明會」へ行くやうに出來てゐる。そこでは足袋がつくられる。手工業の痛々しい労働者、足袋を穿てる人、足袋を包裝する人、足袋を運ぶ人、足袋を運ぶ人が、この過重労働はどうか! ここで僕は前篇「何が彼女を殺したか」の養老院の場面を想ひ出す。養老院の生かす力をさへ失つた老人達、彼等が遊んで「保護」されてゐるわけではなかつた。商品切手の箱をつくる労働があつた。養老院が商品切手の箱を準備する皮肉。だがあそこでは唯だ彼等は不平一言はずに働いてゐた。毎日食はせて貰ふだけ、それだけで有難いと思つてゐた。ところが今度の場合は違ふ。彼等は明かに不平と不満を漂はせてゐるのだ。「食ふことには心配ない。だがそれだけぢや生きてゐられない。さういふことを知つてゐるさういふ子の隣りの女たちの話す會話。これは鈴木重吉の前作よりの一步前進である。(二) 市議の收賄。ここで鈴木重吉は此の市議(名譽職)の裏面を暴露するのになつた。カネをつかふ。即ち、前に述べた「光明會」の出資者が此の市議であり、又、市議の地位を利用して收賄するの此の男であることを露呈する。前篇「何が彼女を殺したか」に出でくる市議の家庭では、鈴木重吉は唯だブルジョアの家庭生活の下になさな暴露したに止つてゐた。その家庭で行はれる「公然の秘密」については觸れてゐなかつたと思ふ。この意味でもチヨッピリとではあるが、鈴木重吉の發展が視へる。(三) 私娼窟のカラクリは少々獵奇的趣味に流れすぎた。「敷島」や「パット」の符調。私娼窟の巧妙な組織。それらの面白さが挿入的に表現されてゐる。併しながら此の部分は、私娼窟といふ社會的存在に對する經濟的解剖が示

されないならば、むしろ無くもな、ではあるまいか。おたく婆さんの正道への立ち歸りのためにだけ立たせられてゐた感がある。(四) 争議は、ガラ幹と温情主義者との上皮をヒンむいた點で興味があつた。勿論、一九三一年の工場労働者の争議は、こんなヤルド的なものではなかつた。勿論、争議は、放擲して激な言葉を弄しつ、その真、争議を擁護してゐる憎むべきガラ幹の姿は、例へば争議に入つて労働者の家族達が「食ふものもなく苦しんでゐる」最中、子供を背負つた内儀さんと酒の中に落ちてゐる職工長(ガラ幹)の對話の瞬間の挿入、等々によつて描き出されてゐた。更に温情主義の若社長は、工賃三割増の要求を曖昧にして、女工すみ子の眞傷事故だけに労働者の關心を集中せよとする態度を示すことによつて、完全にその正體のブルジョアのなことを見せてゐる。それから父親と若社長との對話の中に出てくる労働者に対する資本家根性の手を噛まれるな」と主張する。いづれにして精神的に愛撫する」と主張する。いづれにしても資本家は、ここでは、労働者を「けだもの」と視、雇傭關係を「食物」の關係と見てゐることに變りはない。

これら暴露にあつて鈴木重吉の示した對照的なモンターツユの使用の鋭さは認めなければならぬ。「何が彼女を殺したか」に於ける鈴木重吉の手法は、平明なる描寫力の積み上げの巧みに於て獨自のものを見せた。だが後篇に於ては、ソヴエットの手法が著しく攝取されてゐる。その最も良い成果が「對照的」なモンターツユである。先づ誇張された、戲畫化された演技が行はれる。例へば、(a) 「光明會」の視察に來た太鼓腹の市議の悠々たる態度と「光明會」の長の落付かぬ下品なる物腰。(b) 市議の太鼓腹の側面よりの接寫。バンドの結び目が時計になつてゐる。何となく贅澤さ! (c) 市議の細君は贈賄品を貰ふ時、ヒツタクルやうにして受け取り、内部を直ぐに檢める。その腐敗した動作に對する諷刺。太鼓腹の市議は四つ這ひになり裏口から慌てて出て行く醜態。この二つの對照の妙。(d) 工場結婚の式場における神主の奇妙な格恰。(e) 工場門の意識的な閉鎖具合。等々。多くの批評は、九巻以後の新派悲劇臭を難じてゐる。併し、僕はそれには思はれない。成程、すみ子が若社長と結婚してからの家庭描寫

の中には、意地悪い妹がある、姑がある。腕のきかないすみ子の悲しみは、一種の「妻吉」的な悲しみに通ずる。おまけに温情主義者の若社長は、すみ子が他の男の腕をよさしてゐるのを知つて煩悶する。このあたりは總て、好加減な型を迫つてゐる。氣持が若干不純になつてゐる。けれどこれらは結局、未梢的な部分だ。甚だしく責めるには及ばない。「温情主義の破綻」を彩るための一材料であるにすぎない。前篇の序曲には、鐵路が選ばれた。人生の苦惱を探しに長い長い鐵路を歩みはじめた少女は、その苦惱の中にもまれて鐵路の露さ消える「女」にまでなつたのである。だが「何が彼女を殺したか」の序幕は、もはや出ない。出ななくとも宜い。すでに展開して來た種々な場面描寫によつて、観客には「彼女」を殺したものが、何であるかが明かにされてゐるからである。而も鈴木重吉は、ガツチリと腕を組んで此の鐵道自殺を眺めてゐる一職工と、鼻糞をほじくりながら「彼女」の物語の將來を暗示してゐるかに思はれる。

これは素晴らしい本年度における「傾向映畫」の一勝利を劇する作品である。鈴木重吉、さういふ名前には、その輝かしさを幾層倍にもした。鈴木重吉は、フワリフワリと彼の氣持をさせてシャリナリストたちを悦ばせてゐるは不可げない。彼は大監督らしい重さで自信をつけることを心がけなければならぬ。俳優の長き演技は非常に印象的であつた。和田山 滋 参照價值 日本映畫最近の傑作。すばらしい表現は大衆の心を湧き立たせてであらう。前篇同様、何週間かの續映が豫期される。是非とも一見すべき力作「傾向映畫」。(九月二十四日 淺草常盤座)